The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ローマ字本キリシタン資料に基づく日本語拗音節の研究
Author(s)	竹村, 明日香
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47013
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【14】

氏　　名	竹　村　明日香（たけむら　あすか）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０５７　号
学位授与年月日	平成25年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**ローマ字本キリシタン資料に基づく日本語拗音節の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　岡島　昭浩 （副査） 教　授　金水　　敏　　准教授　矢田　　勉

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、日本語の拗音に関わる音韻について、音声学にいうところの硬口蓋化（palatalization）の観点から、その歴史について再検討を行おうとしたものである。16世紀から17世紀にかけての、キリシタン資料ローマ字本における日本語転写を調査し、また、従来、拗音性の有無が問題とされてきたエ段音について、九州方言の音声的状況を調べた

上で再検討を行うなどして、その様相が、硬口蓋化の二種の別に対応する分布を見せることを示した。さらにそうした状況を、日本語音韻史に位置付ける論述を行ってこれを纏め、400字換算で480枚相当の分量である。

キリシタン資料のローマ字による日本語転写の中で、オ段拗長音の表記には二種があって、-iŏ, -iô のようにiを用いるものと-eŏ, -eô のようにeを用いるものとであるが、この揺れを説明しているのが第Ⅰ部である。

前接の子音(字)によって偏りがあることは先行研究によって言われているが、その偏りが殆どのキリシタン資料に見えることや語頭・語中といった環境による違いがないことを確認した上で、硬口蓋化の 2 種(full palatalization(完全硬口蓋化), secondary palatalization(不完全硬口蓋化))を設定する分析法を用いて、その分布を説明している。すなわち、完全硬口蓋化を起す子音には、iとeの揺れは表れず、不完全硬口蓋化を起す子音のみにその揺れが表われることを説き、この揺れは、不完全硬口蓋化に際して起こる音声の揺れを反映していると解釈している。

第Ⅱ部は、2 種の硬口蓋化という観点で、エ段音の拗音性ならびに、eu 連母音がオ段拗長音化する際の(あるいはオ段拗長音化したeu連母音を表記する際の)問題、さらに日本語音韻史においてこの硬口蓋化の観点が必要であることについて論じたものである。特に九州方言のエ段音の拗音性については詳しく論じているが、これは中世日本語のエ列音を考える際に現在の九州方言のエ列音を参照されることがあったからである。中世のエ列音についての従来の二説に、エ・セ(ゼ)にのみ拗音性を認める説と、すべてのエ列音について拗音性があったと見做す説とがあったが、後者の説では、九州方言のエ列音がそうであることを論拠としていて、ここではこれを詳しく再検討したものである。その結果、前舌子音(歯茎音)と、非前舌子音(軟口蓋音・唇音)では拗音性の頻度が異なっており,前者では硬口蓋化が生じているのに対し、後者ではそのような例が生じていないことを示し、それが第Ⅰ部のオ段拗長音の表記、また通言語的な分布に通じるものであることも示した。また終章では、上代特殊仮名遣(イ列・エ列)の音分布についても、硬口蓋化の観点から、これまでの音分布に通じるものがあることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

キリシタン資料のローマ字による日本語転写の中で、オ段拗長音の表記の二種、-iŏ, -iô と-eŏ, -eô について、従来は日本語の仮名遣の影響などによるものではないか、などと考えられてきたが、本論文は、それに対して、硬口蓋化の二種という観点から分析を行ってその様相を説明している。新しい観点の導入もさることながら、ローマ字本キリシタン資料の精緻な調査分析は、これも従来の説である、編纂過程でのローマ字化方針の変化という解釈を否定するためにも、また、2種の硬口蓋化という観点を導入するためにも有効であり、評価に値する。

さらに、2種の硬口蓋化という観点を切り口に、九州方言のエ列音の様相を分析したことも高く評価できる。この九州方言エ列音の様相が、ただちに中世日本語エ列音に通じるものであると言えないにしても、その調査分析は評価に値する。さらに、上代日本語のイ列音エ列音の問題などをも 2 種の硬口蓋化の観点から分析するなど、日本語音韻史を新しくするものを多く含んでいる。

しかし、本論文にも不十分な点はある。たとえば、合拗長音の解釈にあたって、仮名書き資料をも援用しているが、その際、仮名書き資料の表音性を、やや安易に認めて論を進めている感がある。仮名書き資料は、日本語を母語とする人間が日本語を表記しているのであり、その伝統に縛られる側面を軽視しているように思われる。また、オ段拗長音を論じるにあたって、開拗長音と合拗長音を別立てで論じたために、論が行きつ戻りつしたところもある。更に、上代日本語におけるイ列音エ列音の甲類乙類のある子音分布と、中世日本語のオ段拗長音のローマ字表記が揺れる子音の分布と、九州方言のエ段音に於ける口蓋性を有する子音の分布が重なるところから、その関連性を説くところは、非常に重要な指摘ではあるが、その分布が似ていることがどういう意味を持つのかについての考察が充分に練られたものとはなっていないように思われる。

上記のような問題点はあっても、本論文の価値は高く、これを博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。